

鷹南学園



平成27年度 鷹南学園の評価・検証 結果報告

検証項目	(1) 人間力・社会力の育成 ○他者との適切な関係を構築する力の育成 ○他者と共に自己実現を図っていく力の育成 ○地域や社会等へ貢献する力の育成 ○その他
目標	①キャリア・アントレプレナーシップ教育の充実を図ること。 ②学園あいさつ運動の推進・充実を図ること。 ③ボランティア活動や交流活動を通して、児童・生徒に自己有用感をもたせること。
取組	①小学校間の取り組みにおいて、各校の独自性を出しながら、共通性や共有化を図っていく。中学校においては、コミュニティ・スクール委員会やおやじの会等の協力を得ながら地域の人財発掘を行っていく。 ②学園あいさつ運動の必要性や重要性を子供たちから保護者・地域へ働きかけ、地域・保護者と一体となった学園あいさつ運動にする。 ③参加する児童・生徒に企画運営から携わらせるようにし、当事者意識をより強く持たせることで参加者を増やしていく。
成果 ①「自分のCMづくり」では、小学校両校で取り組むことができた。自分を見つめる良い機会となり、自己肯定感を高めることができた。中学校では、おやじの会の協力を得て「職業人の話を聞く」授業を行い関心を深めた。 ②学園あいさつ運動には高学年の児童が毎回たくさん参加し、参加した児童は大きな声であいさつをしている。二学期からは中学校へも小学生が訪れ、地域の方の積極的な参加もあり、学園全体にあいさつの輪が広がってきたのを感じる。特に中学生が地域の方に挨拶ができるようになってきた。 ③地域やコミセンのお祭りや小学校の運動会に中学生が積極的にボランティアとしてかかわり、大きな力になった。	課題と改善方策 ①活動にマンネリ化が感じられる。効果を検証したり、取組内容を抜本的に見直す時期にきている。両校の特色を探るとともに、共通して取り組める内容を模索していくことが今後の課題である。 ②あいさつ運動は定着化してきているが、日常化という部分ではまだ課題がある。次年度は、「あいさつプラス1」をスローガンに、「自分から進んで」「たちどまって」「笑顔で」等さらに工夫をし、日常化を図っていく。 ③生徒の自己評価が低い傾向にある。「ボランティア」の定義のずれが原因と考えられる。また、地域や教員がもっとボランティアをした生徒を誉め、自分たちの活動が地域者気に役立っている実感を与えたい。参加する生徒が一部に偏っているところも課題である。 【改善策】 ①両校で検討する時間を設定する。 ②継続的に生徒会が主体となり挨拶運動を行っていく。 ③中学生のボランティア参加者を学校便りや朝礼で紹介する。
検証項目	(2) 学校運営について ○小・中一貫教育校の学園組織の活性化 ○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化 ○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化 ○その他
目標	①学園校長会、学園管理職会、学園幹事会を組織的・計画的に行うこと。 ②副校長を核として幹事会メンバーとの連携を強化し、起案決定システムをスムーズに行う。 ③拡大幹事会の動きを活発にし、担当管理職の指導の下、成果を上げる。
取組	①学園校長会を管理職会の前に実施し、会の効率化を図る。幹事会は、中学校で開催する。 ②校長一副校長一担当主幹の連携を強化し、幹事会前の管理職会への起案を確実にに行い、3校の協働体制を強化する。 ③教務部担当副校長が拡大幹事会の進捗を把握し、各担当管理職が指導・助言を行う。
成果 ①今年度も学園長会の次の週に「学園校長会」を定期的に設定し、情報の共有化を図るとともに、学園管理職会・学園幹事会の内容についても共通理解がはかれた。学園校長会と学園管理職会を同日に時間をずらして実施したことで時間を有効に使うことができた。 ②学園幹事会の次第を学園管理職会の時に提示することで見通しをもつことができ、起案者へ適切な指導ができるようになった。 ③「拡大幹事会」を「学園幹事会」と並行して実施することで会議の時間を精選することができた。	課題と改善方策 ①学園幹事会を第2木曜に設定したことで、「生活指導主任会」とかぶることが多く、全担当一斉の会議が少なかった。 ②副校長が複数の部を担当しているため、起案の流れが滞ることがあった。幹事会の次第に沿い、起案者に見通しを持たせるように働きかける必要がある。 ③。研究協力校の事業が終わったこともあり、時間的に余裕はできたが、内容が薄まった感がある。 【改善策】 ①日程調整が必要である。 ②各主任会に校長を含め管理職が参加経営方針の具現化を推進する。職員にチーム学校の視点を周知する ③新しく始まる「オリンピック・パラリンピック教育」や「特別な教科(道徳)」等の学園全体で研修会を実施する。

検証項目	(3) 小・中一貫教育校としての教育活動	
	○小・中学校間相互乗り入れ授業 ○小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動 ○小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 ○キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況 ○その他	
目標	①昨年度の相互乗り入れ授業の検証を受け、引き続き生徒の学力向上、教員の指導力向上につなげる。 ②研究発表の成果と課題を受けて、学園研究を推進する。 ③学園行事の内容の精選を行い、交流活動を充実させる。	
取組	①昨年度の成果を生かし、事前の打ち合わせの時間を確保するとともに、さらに相互乗り入れ授業の指導内容に工夫を凝らし、学力向上に結びつける。 ②思考力、表現力を伸ばす授業を各校の実態に合わせて追求し、学園研究を通して参観、協議し成果を共有する。 ③きょうだい学年交流を、学園公開日に合わせるなどの工夫をし、保護者・地域の方により活動を見えやすいものにする。児童会生徒会交流会の活動に「スマホの上手な使い方やいじめ防止対策」を結び付ける。	
成果		課題と改善方策
①「乗り入れ担当者会議」を実施したことで、情報や課題の共有化が図れるようになった。乗り入れには学力向上の効果が出ている。 小学校での基礎的なコースに中学校教員が入ることで、支援を有する児童の実態を把握することができた。中学校では、小学校教員がT3で入ることで個に対応することができた。児童・生徒には好評であり、手ごたえを感じている。乗り入れ教員にとっても、内容が充実した。 ②2年間の研究の成果と課題を踏まえ、学校を中心に研究を進めたことで、より深い研究が展開できた。「鷹南スタンダード」に「三鷹学びのスタンダード」を網羅した「鷹南スタンダードⅡ」を作成し、家庭への働きかけがさらにできるようになった。 ③「CS子ども熟識」を受け、児童会・生徒会が中心となって全学園生に働きかけることができた。きょうだい学年交流の内容の見直しができ、実りある学園行事が行えた。		①急な授業変更や学校行事等で当初の計画通りに乗り入れ授業を実施することができなかった。小学校教員がT3として授業にかかわったが、対象生徒を1学期と2学期とでは異なる生徒に指定したため、学期の比較は十分にできなかったが、成果は出てきた。 ②思考力を一層高めることと鷹南スタンダードⅡの定着を図ることが課題である。そのため、広報活動の充実に努める。 ③昨年度から、児童・生徒が主体となつたいじめをなくす取り組みを行ってきたが、「児童・生徒の自己評価アンケート」の結果では、「いじめは絶対してはいけない。させない。」という評価が低かった。より一人ひとりの課題として取り組んでいくがこれからの課題である。 【改善策】 ①中学校においても少人数習熟度別学習を展開する。 ②鷹南スタンダードⅡの家庭に周知徹底をする。 ③いじめの話題を意図的・計画的に取り上げる。
検証項目		(4) 児童・生徒の学力・健全育成
		○児童・生徒の学習意欲 ○各学年での児童・生徒の学習内容の定着状況（習得、活用、探究） ○小学校と中学校の評価の一貫性 ○不登校、学校不適応等に関わる児童・生徒の指導・支援
目標	学力	①思考力・表現力を高めるための授業改善を進める。 ②基礎学力や学習習慣の定着を進める。
	健全	①小・小、小・中の教職員の情報交換を密に行い、児童・生徒の健全育成に生かす。 ②保護者・地域への働きかけを強化し、3者一体となり、児童・生徒の健全育成をめざす。
取組	学力	①各校の実態に合わせて研究の焦点化を進め、一つの授業像を確立する。そしてこれを日々の授業実践に広げ、授業改善を進め、子供の思考力・表現力を伸ばす。 ②東京ベーシックドリルの活用、放課後等の補充学習の設定するなどして基礎学力の定着を目指す。また、「鷹南スタンダード」家庭版を作成するなどして、保護者と連携して学習習慣を育てる。
	健全	①学園の生活指導の合言葉「みそあじ言」を鷹南スタンダードにとり入れ、指導観を統一して一層の徹底を進める。 ②拡大幹事会、生活指導部による緊密な連携と適時指導を徹底する。 ③道徳授業地区公開講座等を通して、保護者地域とともに道徳を要とした人権教育を推進する。 ④CS熟識や鷹南っ子ジャンプアッププランの具現化を図りながら、CS委員会と協働して目指す学園生像に迫る活動を推進する。
成果		課題と改善方策
学力		学力 ①今年度は学校ごとの分科会を形成し、校内のつながりを強め「思考力・表現力」を高めてきたが、学園内への広がりが少なかった。 ②学園学校評価から家庭での学習習慣の定着が大きな課題として挙げられた。改善するため、これまで以上に家庭学習の仕方を具体的に指導し、家庭と連携して学習習慣を身に着けるようにする。また、ノートの書き方指導を具体化し教員で共有しながら組織的に思考力・表現力を高めていく。 【改善策】 ①問題構成の工夫、検討場面の工夫に焦点を当てた授業改善を推進する。学園内の連携がより深まるような研究体制を構築していく ②アクティブラーニングを視野に入れた授業改善の取り組み及び、鷹南スタンダードⅡの定着を図る。
健全育成		健全育成 ①各内容について、さらなる浸透を図ることが課題である。 ②児童・生徒間の関係性についての情報共有が不十分であることが課題である。 ③人権教育の要である道徳について教科化を踏まえ、これを充実していくことが課題である。改善に向けて、道徳の時間の評価活動を工夫し、教育活動全般に学習が生かされるよう充実させていく。 【改善策】 ①鷹南スタンダード等について意義や目的について合意形成を進め、さらなる具体目標を絞り込む等指導を工夫する。 ②児童・生徒間の関係性等についてSC等の連携も促していく。 ③道徳の校内研修を各校で実施する。

検証項目	(5) コミュニティ・スクールの運営 ☐ コミュニティ・スクール委員会の組織・運営 ☐ 保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 ☐ 学校と保護者、地域住民との連携・交流 ☐ その他
目標	①コミュニティ・スクール(CS)委員会の運営を持続可能にする体制作りを進める。 ②「鷹南っ子ジャンプアッププラン」から生まれた活動を持続可能にする体制作りを進める。
取組	①CS各委員の役割が継承できるよう、委員・役員の交代を進める。各部の担当管理職を決め協働することによって持続可能な体制作りを進める。 ②「スポーツメントレ」、「異文化体験」、「漢字検定」等については実行スタッフを募集するなどして、実施体制作りを強化していく。 ③「学園生の運動能力向上」は、学園の児童生徒がバランスよくスポーツに取り組むために、CSができることを考える。 ④「いじめのない学校・学園を作る」は、学校・家庭・地域の役割と取り組みについて考えていく。
成果	課題と改善方策
①校長を除く20人の委員のうち、7名が新規CS委員となり、広報部や評価部の部長を務めるなどCS委員の人材育成を進めることができた。委員の若返りにつながり、持続可能な体制作りにつながる成果ととらえる。 ②「スポーツメントレ」などのCS行事の度に支援のためのスタッフ募集を行い、5名から10名程度の協力者を集めることができたのは成果である。 ③学園生の体力向上のきっかけづくりとして、鷹南スポーツフェスタを計画することができたのは成果である。 ④「いじめのない学園・学校づくり」について、小・中学校の代表の子供を集めて生徒会活動につながる「子供熟議」を開催・運営できたことは成果である。	①人材育成に継続して取り組む。 ②学校支援ボランティアの増員。 ③学園生の体力向上のきっかけづくりとして、様々な取り組みの可能性について検討していく。 ④「いじめのない学園・学校づくり」について、アンケートによると危機意識が十分でない子供たちの現状がみられる。生徒会・児童会交流でいじめ問題を取り上げたり、オリバラ教育、道徳の授業で取り上げるなど、児童・生徒にいじめ防止の意識を喚起し続けるようにする。 【改善策】 ①各部にベテラン教員や担当管理職を配置し、活動を通して育成する。 ②CS行事の日程を年度当初に示すとともに、参加の意義を伝えることで、主体的に見通しをもって、実行スタッフに加わる人を増やす。 ③様々な体験活動を実施する。 ④いじめの話題を意図的・計画的に取り上げる。

平成27年度 鷹南学園の評価・検証結果のまとめ

(1) から (5) の検証 結果を踏まえて	1 「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特に成果が得られたこと ・あいさつができる児童や生徒が増えてきている。 ・効率的な学園運営の仕方が理解され、学園職員全体に浸透してきている。 ・子供に考えさせ、それを表現させる授業が浸透してきている。鷹南スタンダードの指導が浸透し、家庭の連携も視野に入れたものに改定することができた。 ・CSメンバーの大幅交代を、人材育成の機会として生かし、安定した学園運営に結び付けることができた。
	2 今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること ①学園研究の成果と課題を生かした取り組みを行い、「思考力・表現力・判断力の伸長」、「基礎学力の定着」、「家庭学習の確立」を推進することが課題である。 ②さらなる人権意識を高めるための教育活動の実践 ③学力向上を図るための教育支援(ユニバーサルデザイン)の研修や授業改善の取り組み。 ④人権意識に基づいた、学級経営の取り組み。
	3 「2」の重点課題を解決するための改善策 ①「鷹南計算ステージ」や「東京ベーシックドリル」を活用し、放課後学習や家庭学習の活性化を行う。アクティブ・ラーニングを取り入れ「思考力・表現力・判断力の伸長」、を図り、「基礎学力の定着」、を推進する。「鷹南スタンダードⅡ」を家庭へ周知徹底を図り、「児童・生徒」「教員」「家庭」の三者一体となった取り組みに発展させる。 ②道徳教育の充実やオリンピックやパラリンピック教育を通して、人権意識を高め、多様な文化や考えの理解推進を図る。 ③教育支援(ユニバーサルデザイン)の研修や授業改善を実施する。 ④意図的・計画的に人権意識を高める学級経営の推進を図る。